

現代台湾（中国）における「神像」― 形象と意味の多様化（2010年度研究計画案）

茨城キリスト教大学 志賀 市子

報告者は今年度から本プロジェクトに参加したため、前年度の調査報告ではなく、今年度の研究計画について発表した。以下はあくまでも研究計画であり、今後の研究の進展状況によっては、変更の可能性もあるということを最初におことわりしておく。

神像とは、「神」という無形の存在を具象化し、霊的な力を付与するモノである。本研究計画では、①聖なるものとしての神像、②工芸品としての神像、③キャラクター商品としての神像という3つの観点から、現代台湾や中国における神像の形象と意味の多様化について検討する。

第一の「聖なるものとしての神像」では、神像の制作過程を通して、単なるモノから霊的な力を持つモノへどのように変化していくのか、また神像の経年変化が信者たちによってどのように意味づけられているのかといった点に注目したい。この他、無縁の死者を祀った「有応公」や「万善公」は神像が作られないが、「大衆爺」の場合は神像がつけられるのはなぜか、「義民爺」はすでに神としての地位を確立しているにもかかわらず、牌位のみが祀られるのはなぜか、すなわち神と鬼の間に位置する超自然的存在の具象化という問題についても検討したい。

第二に、「工芸品としての神像」では、寺廟や宗祠建築を装飾する焼き物「交趾陶」に注目する。「交趾陶」は清道光年間（1821～1850）までに福建省や潮州の職人によって台湾の複数の地域に伝えられ、台湾寺廟独特の装飾芸術を生み出してきた。中でも台湾の嘉義県は、台湾交趾陶の祖とも呼ばれる葉王の出身地であり、交趾陶による寺廟装飾芸術の一大中心地である。葉王は道光6年（1826）に嘉義に生まれ、潮州出身の師匠から交趾陶の技術を学んだ。

近年は寺廟改築の費用を抑えるため、工場生産される焼き物を使用するケースが増えており、交趾陶の高度な技術が生かされる場が減ってきているが、一方で、町おこしのための観光資源として注目されている。本研究では、嘉義県の交趾陶の工房を訪ね、交趾陶の現状について理解を深めたいと考えている。

最後に「キャラクター・グッズとしての神像」では、「Q版神仙」の流行現象に着目したい。「Q版神仙」とは「かわいいキャラクター」化した神仙の形象を指し、人形や携帯ストラップなどの商品として売られている。「Q版神仙」は数年前から台湾を発祥として流行し始めたが、日本のサブカルチャーや「ゆるキャラ」の影響を指摘する説もある。近年は著名な媽祖廟が「Q版」媽祖をオリジナル・キャラクターとし、パンフレットや土産物のロゴに用いるケースも見られる。本研究計画では「Q版神仙」が現代台湾社会においてどのように消費され、また意味づけられているのかといった問題を検討したい。